

論文の和文要旨	
論文題目	<p style="text-align: center;">第三者介入を通じた長期化する避難・難民キャンプ・和平プロセスの 政治的利用</p> <p style="text-align: center;">—コンゴ民主共和国の長期化した紛争の事例から—</p>
名前	米川 正子
<p>本論文の研究課題は、主要な紛争介入者が、特に人の移動、難民キャンプ、和平プロセスという3つの長期化変数要因を操作しながら、なぜ、どのように紛争を維持・長期化させたのかである。本研究は、エドワード・アザールによる「長期化した紛争」の理論（1983年、1990年、1999年）を発展させながら、コンゴ民主共和国東部（以下、コンゴと略す）における27年にわたる紛争に焦点をあてる。</p> <p>「長期化した紛争」理論とは、「人間のニーズ」の剥奪によって紛争が長期化するというもので、そのニーズにはアイデンティティに基づく祖国・領土が含まれ、かつ国際的なつながりを持つ。この人間のニーズが3つの長期化変数要因に関わっているのは、人の移動が祖国から追放されて人々が難民キャンプに滞在することを意味し、また人間のニーズには交渉の余地がないため和平プロセスに影響するからである。本研究は、学術論文、および国連、人権団体などの多様な機関の報告書や文書の先行研究に加え、主にコンゴ難民、およびルワンダ難民に聞き取り調査を実施する質的方法論を用いる。</p> <p>序にあたる第1章では、本研究の紹介と、当該課題を選択した理論的背景の整理を行った。続く第2章では、一般的な紛争の特徴と目的、長期化する紛争と和平プロセスのそれぞれの概念、および紛争期間に影響を与える要因（民族に基づく領土と天然資源、および第三者介入）について概説した。第3章では、避難と難民キャンプの特徴、目的、戦略、および3つの変数要因における米国の介入について検討を加えた。第4章では、ルワンダ愛国戦線（RPF）による徴兵プロセス、ルワンダ侵攻、内戦、平和構築、ジェノサイド、RPFの軍事的勝利など1990年代前期に生じ、コンゴにおける長期化した紛争の土台となった事象を考察した。第5章では、ルワンダ政府がなぜ、どのように2つの難民グループ（フツ系ルワンダ人とツチ系コンゴ人）とそれぞれの難民キャンプを操作し、かつ他国から軍事援助を受けたことにより、1996年にコンゴへの侵攻を軍事的勝利に導いたのかについての分析を行った。第6章では、ルワンダ政府によるコンゴ再侵攻と紛争の長期化が可能になった和平プロセスの延長プロセスを検証した。第7章では、ルワンダが「紛争後」のコンゴ東部で、主に国連主導の平和構築/国家建設プログラムに介入したことにより、恒久的な紛争状態を生み出し、それを継続させた方法と理由を分析した。第8章では、難民の証言をもと</p>	

に、RPFによるルワンダとコンゴ侵攻の狙い、ツチ系コンゴ人のルワンダへの移動の特徴と背景、ツチ系コンゴ人難民キャンプにおける役割について論じた。最後に第9章では、本研究の主要な研究課題への結論を示すとともに、依然として残る今後の課題を明らかにした。

以上を踏まえた本研究の結論は次の通りである。紛争従事者とグローバルな関与者が長期化する紛争を天然資源へのアクセスと国家建設の実施への介入の機会として認識しているため、以上の3つの変数要因への介入が行われ、結果として紛争を長引かせていることが明らかになった。さらに本論文では、コンゴ侵攻以降、ルワンダ政府が同盟グループと「見せかけの敵」の両者を含む多数の武装グループを繰り返し支援・活性化することにより、3つの変数要因を組織的に操作し、紛争を長期化させたことを示した。

なお、本論文は、ツチ系コンゴ人のルワンダへの避難の目的と特徴、彼らの移動を引き起こした紛争の戦術、および領土紛争の長期化に影響を与えた難民キャンプでの非軍事活動を調査した最初の研究である。